

国立国語研究所学術情報リポジトリ

マルチアクティビティに伴う発話の分類：
遂行発話と雑談

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2019-02-14 キーワード: 日常会話コーパス(CEJC) 作成者: 天谷, 晴香, AMATANI, Haruka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001678

マルチアクティビティに伴う発話の分類： 遂行発話と雑談

天谷 晴香（国立国語研究所音声言語研究領域）[†]

Utterances accompanied with multiactivity: Executorial speech and small talk

Haruka Amatani (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

日常的に会話はマルチアクティビティ(複合活動) の中で行われることが多い。他の活動を主として行う場面での会話は、雑談に加えて、活動の遂行に関わる発話が見られる。雑談も活動に関連して行われることが多く、全くその場の物事と関わらない発話は少ない。その場の物事に関する発話とその場のない物事に関する発話の区分は談話研究において重要である。Chafe (1994) は意識の宛先をもとにこれらの言語表現の分類を提示した。話し言葉においては話し手と聴き手が会話スペースを共有することがほとんどであるため、書き言葉に比べて場に即した言語活動が行われやすい。本発表では参加者が共同で料理活動を行いながらの会話データを扱う。料理行程を進捗させるための発話と料理の進捗に関わらない発話を分類する。

1. はじめに

日常会話は他の活動に伴って行われることが多い。会話内容は活動内容に影響される。また会話の種類は、活動に必要な会話と活動に関わらない雑談のような会話がある。

例えば、二人以上で共同で料理をする時、協力してひとつの作業を進める場面では特に、互いに発話によって作業の進行速度やタイミングを調整する必要がある。難度の高い共同作業-例えば一方がフライパンで材料に火入れをしている所に他方が調味料を入れるなど-の際には発話による調整も増えるだろう。一方で、一人で材料をかき混ぜるような単純作業のような場面では料理行程に関わらない発話も出やすいと考えられる。

マルチアクティビティ研究は、複数の活動がひとつのマルチアクティビティとして活動間の境界が際立つことなく実行される方法を分析するものである(Mondada 2011 他)。本稿は、活動に伴う発話をその性質によって分類し、分類された発話が活動の全体構造の中でどのような位置に発現するか探るものである。

2. 発話の分類

日常の活動に伴う発話を分類するため、本研究では二つの指標を検討する。「その場の事物への関与」と「活動遂行への関与」である。

「その場の事物への関与」は活動の有無に関わらず一般的な会話の分類として有効な指標である。2. 1節で詳細を見る。「活動遂行への関与」は、活動に伴う会話の特徴づける指標である。この指標には段階性を設ける。これらについては2. 2節で論じる。

[†] h-amatani@ninjal.ac.jp

2. 1. その場の事物への関与

その場の事物・状況に関係した発話であるか否かをひとつの指標とする。その場の事物への関与の有無が会話の性質を測るひとつの指標にたりうることに直接議論は少ないが周道的に言及している研究は多い。¹これは言語使用者にとって直感的な指標と言えるだろう。

話し手の意識の在りかを軸に Chafe(1994)はその場の事象に関わる発話と関わらない発話について分類の可能性について論じた。² Chafe は、言葉の受け取り手と距離のある書き手と異なり、話し言葉では発話者が発話の受け取り手と場を共有しているため、その場の事物に関する発話が多く見られると推測した。しかし彼の夕食会のデータにおいてはその場の事物に関わらない発話が多く見られている。

2. 2. 活動遂行への関与

活動遂行に関わる発話は、関与の度合いに段階がある。段階を捉えるために、まず関与度の強さ・弱さの両極にあたる発話の性質を考える。

マルチアクティビティ研究において会話活動を独立に扱う立場と他の活動の一部と捉える立場があるが、会話活動の独立性の段階について議論されることは少ない。独立性の度合いを明確にすることがマルチアクティビティをより詳細に理解する手立てとなる。会話活動の独立性の段階は、本稿における発話の活動遂行への関与の度合いに相補的である。

活動遂行に必要な発話として、活動の指示をする発話と、指示を実行するために相談・協議する発話が考えられる。

活動遂行の手順には二人以上で行う活動の場合、参加者間の関係によっていくつか異なるパターンが考えられる。一つには、参加者の一人が活動の手順に熟知しており活動を主導していくパターンがある。また他には、活動の手順をよく知らない参加者が集まって相談しながら遂行していくパターンが考えられる。いずれのパターンにおいても、指示発話と相談の発話は遂行に必要である。

指示の発話としては、例えば天谷(2017)における一方の参加者が他方に化粧行為をする際の「眉毛を描きます」と声をかけるような発話がある。また相談・協議の発話としては同じデータから「このカクツとなっているのはそういう風に生えてるん?」と聞くような自身の現状認識を伝えるような発話が含まれる。

3. データ

現在構築中の『大規模日常会話コーパス』から、日常の料理場面(お菓子作り)のビデオデータを分析の対象とした。参加者は2名で、母親と中学生の息子である。ビデオは全体で約35分で、分析対象とした断片はビデオ開始から約6分から約8分の2分間である。

4. 分析と考察

2節で示した発話の分類の指標を用いて発話データを分析した。対象の断片に見られた発話のうち、あいづち表現と感動詞表現は以下の分類から排除した。

分析対象の単位は統語的に文を構成するひとまとまりとした。『大規模日常会話コーパス』

¹例えば、子供の指差しについて実験を行った So et al. (2010)では、So et al. (2009)との実験結果の違いを子供と大人の差だけでなく、物語り(displaced story telling)とその場の会話(here-and-now conversation)の違いに求める記述をしている。

²Chafe は前者を「直接モード immediate mode」、後者を「置換モード displaced mode」の発話とそれぞれ呼ぶ。置換モードにより未来や過去の出来事についての言語表現ができる。

における発話単位がおよそこれに相当する。ただし、コーパスにおける発話単位では倒置文はふたつの発話単位とするが、本分析では統語的に文を構成する単位を対象とするために倒置文はひとつの単位として扱った。

4. 1. 発話の分類：その場の事物への関与

Chafe が推測したように発話全体の多くがその場の事物に関したものであった。分類の対象となった発話文 59 文中 45 文(76.27%)がその場の事物に関する発話であった。これは Chafe の夕食会のデータとは割合が反対だが、活動場面では夕食会のように会話がその集まりの主たる目的となる場面と異なり、その場で活動を遂行させる目的が主であるためと考えられる。

その場にはない事物をトピックにした発話は 59 文中 14 文(23.72%)と限られた数であった。14 文中 2 文が断片直後に起きた事例で、12 文が断片の後半に起きた事例である。

その場の事物に関わらない発話事例と活動の構造との関係を見てみると、どちらも料理の行程と行程の間に起きている。一つ目は断片の開始直後に起きたもので、次の行程を開始するためにレシピを読み上げる発話である。料理活動においてレシピを読み上げる行為は、より一般的な発話機能として捉えると「計画」に当たるものである。二つ目の事例では、話の受け手側は別の行程に着手しているが、トピックの導入者はひとつの行程を終え片付けをしながらトピックを導入し発話している。この時のトピックは、料理用のはかりを買いに行く店についてであった。母親が「今度料理用のはかり買おうかな。」「最近いいお店見つけたから。」とトピックを導入したものである。

4. 2. 発話の分類：活動遂行への関与

活動遂行への関与について、活動の遂行に関わらない発話と、遂行に関わる発話に分類した。さらに遂行に関わる発話を 2. 2 節で論じたように指示発話と相談・協議発話に分類した。それらに当てはまらない発話も見られた。

活動の遂行に関わらない発話は全体 59 文中 21 文(35.59%)であった。遂行に関わらない発話もその場の事物と関係しており、データの中では息子が母親に材料のチョコレートをすこし食べていいか聞く「一つかじっていいべ。」などの発話が見られた。

活動の遂行に関わる発話は 59 文中 38 文(64.4%)であった。

活動の遂行に関わる発話のひとつのカテゴリーである指示発話は 59 文中 17 文(28.81%)であった。指示発話の例としてはレシピの読み上げや「余ったらこの辺に置いといて。」というような材料の扱いに関する指示が見られた。

また相談・協議発話は 59 文中 18 文(30.5%)であった。発話内容は、料理に使用するバター分量をはかる際に発された「三十グラムってこんななの？」や、バターを器に塗りつける行程の途中に見られた「お母さん、かなり塗ったと思うけど、俺。」のように参加者が違いに自身が行っている行程の状態を相手に報告するものであった。

さらに遂行に関わる発話のうち指示や協議に分類されないものが 3 文(5.08%)見られた。これらは息子がバターを器に塗る際に「塗ーり。」と発話したものであった。このような発話は感動詞的にも捉えられるが、ここでは作業の状態を報告しているものとして相談・協議発話に準ずる説明発話として分類した。

4. 3. 二つの指標の交わり

その場の事物への関与と活動遂行への関与、二つの指標を用いることでより詳細な発話の分類が可能になった部分がある。

活動に関与する発話は通常、その場の事物に関わるものと考えられる。これには 4. 1 節で報告した、料理用のはかりを買いに行く店についてのトピック発話群が相当する。一方で、活動の遂行に深く関与しながらその場の事物に関する発話でなかったものが、レシピの読

み上げである。レシピの読み上げは、上で述べた通り、一般的な機能として「計画」の発話としての機能を持っており、Chafe がその場の事物に関わらない発話の特徴として述べた「未来」に関する発話に相当するものであると考える。レシピの読み上げ発話は、「未来」に行く行程あるいは「未来」に出来上がるものについて述べた発話であるため、その場の事物に関わったものではない。

料理用のはかりについてのトピック発話とレシピの読み上げ発話は同じようにその場の事物に関わらない発話であるが、活動の遂行への関与の指標を取り入れることで一方は活動の遂行に関わらずもう一方は活動の遂行に関わっており、マルチアクティビティの中で異なる機能を持った発話として捉えることができた。

また、その場の事物に関わらない相談・協議の発話として「量れって、うち、はかりない。」という発話が見られた。これはそのしばらく後に現れる「今度料理用のはかり買おうかな。」のトピックの導入に繋がるものである。今回の指標を用いると「量れって、うち、はかりない。」はその場の事物に関わらない活動の遂行に関わる相談・協議の発話として分類され、「今度料理用のはかり買おうかな。」はその場の事物に関わらない活動の遂行に関わらないトピック発話として分類される。このように複数の指標によってトピックの移行のグラデーションを捉えることが可能になる。

5. おわりに

本稿では日常の活動に伴う発話の分類を、「その場の事物への関与」と「活動の遂行への関与」を軸に試みた。「その場の事物への関与」については、Chafe が述べたように関与度の高い発話が多く見られた。またその場にはないものを話題とした発話は活動の行程の間に発現した。「活動の遂行への関与」については段階性を捉える試みとして、活動の遂行に関わる発話をその性質によって指示発話、相談・協議発話、説明発話に分類した。また、二つの指標を用いることでより多角的にマルチアクティビティに伴う発話の分類を行えることを示唆した。

謝 辞

本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」による成果を利用して行われたものである。

文 献

- 天谷晴香 (2017). 「他者への化粧行為と雑談」. 『日本認知科学会第 34 回大会発表論文集』.
- Wallace Chafe (1994). *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lorenza Mondada (2011). The organization of concurrent courses of action in surgical demonstrations. In Jurgen Streeck, Charles Goodwin, and Curtis LeBaron (eds), *Embodied Interaction: Language and Body in the Material World*, pp. 207-226. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wing Chee So, Ozlem Ece Demir, and Susan Goldin-Meadow (2010). When speech is ambiguous gesture steps in: Sensitivity to discourse-pragmatic principles in early childhood. *Applied Psycholinguistics* 31-1, 209-224.
- Wing Chee So, Sotaro Kita, and Susan Goldin-Meadow (2009). Using the hands to identify who does what to whom: Gesture and speech go hand-in-hand. *Cognitive Science* 33, 115-125.